

人類の負の遺産を展示する博物館

—ロンドンにある2つのホロコースト展示—

兼清 順子

(立命館大学国際平和ミュージアム学芸員)

1. はじめに

博物館は来館者が滞在する限られた時間の中で多くのことを効果的に伝えようと様々な努力を重ねている。人類の負の遺産である戦争や虐殺を扱う展示では、歴史を的確に、資料の情報を正確に伝えるとともに、当事者やその周辺の人々の心情、また、それらに触れる来館者の心情にも配慮しながら展示を構成することが求められる。これまで平和博物館をはじめ負の遺産を扱う博物館の多くは、出来事を体験したり目撃した人々の証言を聞き書きや証言映像として取り入れたり、彼ら自身が直接来館者に語りかける場を設けるなどして歴史を伝えてきた。

しかし、第二次世界大戦から70年以上が経ち、この時期の出来事を扱う博物館の多くは今後、体験者や証言者の存在なしに展示の中で負の歴史を伝える方法、これまで体験者や目撃者が残したものを効果的に活用する方法を検討しなければならない。本稿では2017年4月に視察したロンドンユダヤ博物館と帝国戦争博物館における二つの対照的なホロコースト展示の様子を人類の負の遺産を扱う博物館展示の事例として報告する。

ホロコーストは、ナチス・ドイツが引き起こした大量殺戮であり、戦争過程の中で暴力性が増し最終的には全てのユダヤ人やシンティ・ロマを絶滅の対象とし、その他の民族や集団に対しても虐殺を行った。中でも、1939年から45年間にヨーロッパでおよそ600万人のユダヤ人がゲットーでの劣悪な環境、銃殺、強制収容所での奴隷労働や絶滅収容所でのガス殺などで命を奪われた¹⁾。サバイバーやその家族、そしてユダヤ系の社会において、ホロコーストは現在まで深い影を落としている。ホロコーストは、規模や目的、実施に促した近代の要因との関係から20世紀の人類の負の遺産の象徴として哲学や思想、芸術など様々な分野でも主題として扱われている。

ホロコースト博物館は、北米やイスラエルをはじめ

ユダヤ系の人々が多く住む地域や、ドイツやポーランドなど、この歴史と関わり深い地域など世界に多数作られている。ほとんどの施設が当時の実物資料や写真、サバイバーの証言をふんだんに取り入れて展示を展開しているが、設置主体や規模や目的により施設や展示の性質に違いもある。今回訪れた施設はともにロンドンにあり、虐殺の行われた記憶の場や追悼を主とした施設ではなく（犠牲者追悼の空間は一部にはある）、展示を通して歴史を伝える場である。

この調査と報告は、挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築 (16K12814)」によるものである。

2. ロンドンユダヤ博物館ホロコースト展示室

(1) ロンドンユダヤ博物館(The Jewish Museum London)の概要

この博物館は、もともと1932年に設立されたユダヤ教関連の歴史資料のコレクションで知られていたユダヤ博物館 (The Jewish Museum)、1983年設立のイーストエンドユダヤ博物館 (The Museum of the Jewish East End) の2館であった。イーストエンドユダヤ博物館は、シティの中に住むことが許されなかったユダヤ系移民が集住したことで移民労働者のスラムとなり、19世紀には東ヨーロッパからユダヤ系移民が多数流入したイーストエンドでユダヤ系移民の定住の歴史を伝えるため設立された。その後、ナチスを逃れた人々の体験やホロコースト教育プログラムも行うようになった。1995年に2館が合併した時は、別施設のまま運営されていたが、2010年に現在の建物に集合され常設展示を公開した。ロンドンユダヤ博物館はロンドン市街の中心部、若者や観光客でにぎわうカムデン・タウンにあり、1階にレセプション、ワークショップ室、カフェ、売店、ミクバ (ユダヤ教の儀式用水浴場) の復元、中2階にトーラー (ユダヤ教の経典) を中心にユダヤ教関連の歴史資料 (Judica) を通して、

ユダヤ教とその宗教文化を伝える展示室がある。2階には中世から、特に近代以降ヨーロッパ大陸から移入して形成されたロンドンのユダヤ系社会の歴史展示室がある。ホロコーストと関連して、終盤に大英帝国の兵士として従軍したユダヤ系イギリス人兵士や大陸から子供達だけで疎開したキンダートランスポートのことも紹介されている。この展示室は2階の半分以上を占め、その横にホロコースト展示室と資料閲覧室がある。3階は特別展示室である。

現在、館の使命は、「宗教や文化的背景を問わずあらゆる来館者に対して、発見、疑問、理解を促すことで、イギリスのユダヤ系の人々の歴史、アイデンティティ、文化についての驚き、喜び、関わりをもたらすことであり、目指すものは、文化の多様性とマイノリティ集団がもたらす貢献が、社会全体を豊かにするために、探求され、評価され、喜ばしいものとされる世界である」²⁾とされており、ホロコースト展示室もあらゆる宗教や文化的背景の人々、つまりホロコーストに対する前提知識の少ない人々や子供も対象としている。

(2) ロンドンユダヤ博物館のホロコースト展示室

このホロコースト展示は、アウシュヴィッツを生き延びたユダヤ系イギリス人レオン・グリーンマンの体験を追う形で展開される。展示資料や説明も、レオンとその家族に焦点を当てたものが中心に据えられて目を引く作りになっている。

1910年にイーストエンドに生まれたレオンは、青年時代はボクシング選手として活躍し、その後オランダで妻の親族が経営する書籍商の事業に携わった。息子が生まれた1940年、ナチスはオランダに侵攻した。イギリス国籍のある一家は移送を免れるはずであったが、不測の事態が重なり国籍を証明できずに妻子とともにアウシュヴィッツに移送された。妻と息子はアウシュヴィッツに到着後すぐに殺害された。しかし、レオンは6箇所の収容所を奇跡的に生き延び、解放後すぐにオランダを経てイギリスに帰国し、やがて体験を語るようになった。レオンはイーストエンドユダヤ博物館に資料を寄贈し、毎週のように訪れ、2008年に亡くなるまで証言を続け、1990年代には彼の体験についての書籍が出版された。

展示室中央入り口には立体ガラスケースが一つあり、トルソーにレオンの囚人服、妻のドレス、息子の服とおもちゃが展示され、家族のシルエットを浮かび上がらせる。このケースの背面は、ホログラムのよう

に展示資料(子供のおもちゃなど)を手にとって話すレオンの姿が映し出される。

これを囲むように、展示室周囲には、レオンの結婚から強制収容所での生活と解放までの流れを伝える説明や写真、レオンがつけたダビデの星、登録証、モノヴィッツから出したハガキの他、タバコ入れ、スプーン、ペンナイフや歯ブラシなど強制収容所で使っていた品、イギリスに戻ったレオンがBBCで体験を語った際の音声記録レコードなどが展示され、実際に聞くことができる。これが展示室のおよそ3分の2を占める。展示室にはこのほかにアウシュヴィッツで使われていたカップなど数点の資料の展示と他のサバイバーによる証言映像コーナーもある。これら全てが小さな展示室の周囲を囲むように簡潔に展開され、白木を中心に明るくシンプルな演示で統一されている。

この展示にはガス室の死体など残酷な場面を写した写真は登場しない。戦前の幸せな家族の様子が展示室の最も目を引く位置に配置されて過不足なく浮かび上がり、レオンとその家族がホロコーストの最中に辿った道筋がなぞられる。来館者は、ホロコーストの中に投げられたこの家族の運命を通して、その一端に触れる。また、他のサバイバーの証言映像や資料展示を通してさらに歴史を知ることができる。ホロコーストに対する知識が少ない人や子供でも何かを感じ、理解することが可能な範囲で展示は展開されている。ホロコーストをもたらし複雑な政治過程を十分に説明したり、最新の研究に基づく見解や資料が展示されているわけではない。しかし、レオンの体験は多くを訴えかける。

筆者の見学中に、数組の来館者が訪れた。中でも印象に残ったのは、2組の対照的な来館者である。1組目は、祖母と孫と思しき2人組だった。彼らは展示室に入ってくると、あまり言葉を交わす様子はなく、それぞれに展示物を見て回っていたが、一通り展示を見ると2人でベンチに座り寄り添って証言映像を見たのち、一緒に立ち上がり、展示室を出て行った。この2人の様子は、上の世代から下の世代へホロコーストについて伝える上でこの部屋が機能していることを想像させた。2組目は、人種構成に多様性がある20人程度の学校団体だった。クリップボードを持ちながら賑やかにおしゃべりをする十代後半(高校生)の団体は、一気に部屋になだれ込み、部屋中を歩き回り、やがて一気に展示室から出て行った。1組目とは異なる見学態度だが、明らかに家族の出自や文化的背景が異なる彼らがともにレオンの体験に触れたことで今後しばら

くレオンの体験が共通の参照軸になる可能性を感じさせるものだった。

3. 帝国戦争博物館ホロコースト展示室

(1) 帝国戦争博物館 (Imperial War Museum London) の概要

帝国戦争博物館は第一次世界大戦を記録し、その犠牲者を顕彰するため、1917年3月5日に設立が決定され、1920年に開館した大英帝国の戦争博物館である。1939年には第二次世界大戦に関わる資料も収集の対象とされ、朝鮮戦争の際には第一次世界大戦以降イギリスが関わった戦争を扱うこととなり現在に至っている。その結果、近代の戦争に関する資料の収集や展示、研究や教育を行う傑出した機関になった。現在は全英の5つの博物館によって構成されており、5館合計で年間約240万人が訪れている。ホームページでは、「近代の戦争の歴史と“戦時の体験”についての理解と研究に資すること、奨励することを目指す」³⁾とあり、近代における戦争について問う研究に根ざした施設であることがわかる。

ロンドン市内にある現在の建物は、19世紀に精神病院として建てられ、1936年から博物館として使用されている。周囲は公園として整備され、芝生でくつろぐ家族もおり、和やかな雰囲気だが、建物正面には海軍の15インチ砲が据えられ、近づくほどその大きさに圧倒される。館内に足を踏み入れると、巨大な吹き抜けのギャラリー「戦争の目撃 (Witness to War)」展示室が目前に拡がり、天井から吊るされた戦闘機や床に据えられた弾道ミサイルなど、9点の巨大資料が目を見奪い、トラックが小さく見える。

常設展示はホームページの記載順に、「第一次世界大戦展示室 (First World War Galleries)」、「ホロコースト展示室 (The Holocaust Exhibition)」、「戦時下の家族展示室 (A Family in Wartime)」、「情報戦展示室 (Secret War)」、「戦争の目撃 (前述の巨大な吹き抜けギャラリー)」、「アシュクロフト卿展示室 (Lord Ashcroft Gallery) (敵前での勇敢な行為に対する戦功章であるビクトリア十字章などのコレクションと該当者の紹介)」、「珍しい戦争資料 (Curiosities of War) (珍しい収蔵品の紹介)」、「平和と安全保障 1945-2014 (Peace and Security: 1945-2014)」、「転換期: 1934-1945 (Turning Points: 1934-1945)」があり、このほかに特別展示室、カフェやショップがある。初の総力戦であった第一次世界大戦を起点にその後の世

界の戦争について捉える構成にこの博物館の歴史観が現れている。第一次世界大戦展示室は、プロジェクションマッピングをはじめとした最新の展示技法を駆使し、軍事的戦術から兵士個人の心情社会全体の反応や動員方法まで全てを網羅し尽くす試みを感じらるが、第一次世界大戦から100周年を記念してこの展示室が最近更新され、新しい展示設備を備えていることも影響している。

(2) 帝国戦争博物館のホロコースト展示室

展示は2フロアに渡り、長大で複雑な構造であり、全体の印象は研究者が著したホロコースト歴史書である。最初にここでのホロコースト定義が示された後、前半は第一次世界大戦後のヨーロッパ情勢から1938年の水晶の夜まで、ナチスが台頭して人種主義に基づく国家が作られユダヤ人の置かれた状況が悪化していく状況が描かれる。後半はポーランド侵攻以降、戦争の進展とユダヤ人に対する処遇が段階的に絶滅に向かい虐殺方法も転換していったことが当時の資料や写真を用いながら説明され、最後は解放から戦後の裁判やサバイバーの証言で終わる。この館が近代の戦争に関する研究の進展に主眼を置くことが展示室にも反映されている。見学は14歳以上を対象とし、入口では展示に衝撃的な内容が含まれることを伝え、途中で見学を終えることができる迂回路も作り、備えをした上で、衝撃的な内容を含めて展示している⁴⁾。ホロコースト教育では大量の死体の写真など日常とかけ離れた残酷さを理解するには、政治や社会に対する知識と理解が備わり、ホロコーストが複雑な政治過程や社会のあり方の帰結として起きたことを理解し、この歴史を通して向き合うべき課題を掴み取る必要がある。

導入で示されるこの展示室におけるホロコーストの定義は、ナチスドイツが何百万もの人々を奴隷化し虐殺したことで、中でもすべてのユダヤ人を絶滅させようと150万人の子供を含めた600万人のユダヤ人を殺害した出来事とするものである。導入ではこの他に、サバイバーの証言映像が2台とホロコーストに飲み込まれた様々な人々の写真が展示されている。この部分の演示は白木で作られたシンプルなものである。

導入を抜けて前半に当たる最初の展示フロアは、第一次世界大戦後のヨーロッパ情勢、ヒトラーの台頭、焚書、ユダヤ系企業のボイコット、人種主義国家の形成、これを進めたプロパガンダ宣伝、ニュルンベルク法、帝国の拡大、ユダヤ人の脱出の模索、水晶の夜事件の構成で展開される。壁面は赤で統一され、第三帝

国の中で起きたことを扱っていることが示される。ユダヤ人禁止と書かれたベンチの複製（ユダヤ人は公園のベンチに座ることを禁止され、実際にベンチにそのように記された）の前には、当時そのような差別を受けた体験について語る証言映像を見るコーナーがある。文書や写真、個人の身の回りの品などを中心に通史展示の印象を与える。水晶の夜事件は、第三帝国全体でユダヤ人への暴力が展開され、以降ユダヤ人を取り巻く状況が劇的に悪化した転換点であり、これに合わせて階も変わる。

後半に当たる下階の展示フロアでは、戦争の進展とともにユダヤ人人口の多い地域が支配下に入り、ナチスの政策が絶滅に向かう中、各段階で何が行われ、その中で彼らがどのように生きようとし、殺されていったのかを詳細に追っている。ポーランドへの侵攻、占領政策、ナチス占領下のヨーロッパ、ソ連侵攻、移動虐殺部隊、虐殺の現場、ゲットー、最終的解決、移送、アウシュヴィッツ、収容所の中、救援、解放、発見と展開し、最後はシアターでサバイバーの証言映像を見て終わる構成になっている。前半では、壁面に白木（ホロコースト前）と赤（ナチスが台頭した第一次大戦後のヨーロッパ）を用い、この後半では黒（ナチスによる虐殺）と白木（解放と生存者の証言）を用いているが、内容に沿った雰囲気を作る演出（ゲットーでは、むき出しの木の壁、移送では貨車の中など）もある。

中でも衝撃的なのは移動虐殺部隊と虐殺現場の展示である。移動虐殺部隊は、ソ連との戦線の背後で、侵攻した地域のユダヤ人を集めて銃殺する任務を負った。クリストファー・ブラウニングの『普通の人びと—ホロコーストと第101警察予備大隊』⁵⁾などで知られるように一般の部隊に属する普通の人々が任務として大量虐殺を行っていた。殺す側の精神的な疲弊や効率性の問題から絶滅収容所での虐殺へと手法が変えられることになったが、100万人ほどがこうした方法で殺害された。展示では、リトアニアのヴィルナ近郊ポナリーの虐殺を取り上げている。虐殺現場の写真、ホロコースト前のヴィルナでの生活を伝える写真と回想、殺害された人々の遺品（メガネや鍵束など）、虐殺部隊員の手記が展示されている。手記には隊員6名に対して頭と心臓に銃弾を3発撃ちこむ命令が下り、手記を記したこの隊員は心臓を担当したことやその時の様子などが綴られている。先述の展示迂回路はこの先にあり、来館者への衝撃を想定の上で展示が運営されていることがわかる。

最終的解決としてユダヤ人を絶滅させるヒトラーの

命令は口頭で行われていたため史料が残されていないが、それを担った実態があった。ホロコーストは官僚制をはじめ近代の社会システムが担った大量虐殺であった。これを伝える展示室は、指揮命令系統のつながりが、床や壁面に張り巡らされるように描かれ、映画『マトリックス』の中にいるような印象を与える。部屋中に張り巡らされた図は詳細な調査に基づくものである。

アウシュヴィッツのセクションに入るには、人々が収容所へ移送された貨車の中をイメージした展示空間を通らなければならない。移送のシステム、移送された人が家族や親族などにむけて書き貨車から落とした最後の手紙や、移送に使われたのと同型の貨車などが展示されている。この展示の中には次のセクションであるアウシュヴィッツのジオラマが貨車の隙間に見たてた穴から垣間見える場所があり、貨車の隙間から外を覗いたサバイバーの証言が演示に取り込まれている。

貨車の空間を出るとアウシュヴィッツの展示に入る。まず、貨車が到着したプラットホーム、労働かガス室行きかの選別、ガス室に送られる人々、それらを補助する役割を与えられた囚人の様子などを含む一連のジオラマが現れ、この横を通り抜けながらガス室と焼却炉の写真に向かう構成になっている。ジオラマの横には壁に沿って椅子が並び、この場面に身を投じられたサバイバーの証言を聞くことができる。その後には収容所での生活の展示に入る。展示資料は、到着した人々から奪われた靴や鞆などがぎっしりと詰め込まれたケース、囚人服や隠し持っていたり工夫して作った所持品などである。アウシュヴィッツのセクションには、証言映像はない。証言は全て音声で聞く仕組みで、アウシュヴィッツ到着時の様子、収容所内の様子、生き残るための収容所内で結束の3箇所にある。

アウシュヴィッツのセクションを出ると、収容所の解放以降の歴史を伝えるセクションがある。ナチスはホロコーストの証拠隠滅を図ったが、残された死体や瀕死の囚人の様子は世界中に報じられた。来館者もまた、それを目にする展示となっている。また、救援者やレジスタンスについても紹介されている。

そして最後にサバイバーが証言をする映像シアターがあり、解放後のことも語られ、来館者はホロコーストの歴史の外に出ることになる。

4. 終わりに

今回訪れた2つの施設は近距離にあり、互いが補完しあうような存在になっている。1人のサバイバーの物語に寄り添い、子供でもホロコーストの歴史に触れることができるロンドンユダヤ博物館と、資料と研究成果を展示で展開し、来館者に近代の暴力のあり方としてホロコーストを見せる帝国戦争博物館は対照的である。両館とも、館の掲げる使命に忠実に展示を展開し、演示方法や証言の提示方法もそれぞれの目的に応じて練られている。博物館教育では五感による鑑賞が可能な演示の重要性が指摘されてきた。どちらの展示室にもゲームや体を使う道具などの仕掛けはないが、来館者が五感を通して展示を見ることが強く意識されている。また、それらはこれまでの戦争やホロコーストに対する、両館の取り組みの上に実現されたものでもある。

ロンドンユダヤ博物館は、レオン・グリーンマンが資料を寄贈し、自らも展示室を訪れては来館者に話をしていたことを下敷きにした展示である。レオンとその家族の遺品を展示した中央の展示ケースの中では今も、その一部を手に取り語る晩年のレオンの姿が映像として来館者を迎えている。

帝国戦争博物館では、アウシュヴィッツの展示の中では証言映像が登場しないなど、ホロコーストの表象をめぐる、死者は語り得ないことや強制収容所の中の暴力が日常の感覚では理解できないものであり、語り伝えることに限界があることなど、ホロコーストに関わる証言についての議論も踏まえて展示が展開されていることも窺える。この展示室は開館以来高く評価されているが、批判もある。例えば、トム・ローソンは、ホロコーストの歴史を詳細に豊かに展開し、犠牲になった人々の声を組み込もうとしている努力を評価しながらも、展示の語りは歴史を客観的なものとして単独の文脈で押し通し、他の解釈の余地を来館者に与えないと非難している。さらにローソンはナチスの反共面が強調されすぎて、当時のヨーロッパにおける反セム主義の根深さへの検討が不十分であり、加害者の顔が見えないこと、映画『ショア』、アウシュヴィッツ博物館などの視覚的イメージにひきづられ、アウシュヴィッツを強調するあまりトレ布林カやハウムノなど他の絶滅収容所を妥当に取り上げていない。結局のところこのホロコースト展示は、当時のイギリスの戦争を正当化する形でホロコーストを伝えることで戦争の顕彰という戦争博物館の目的を叶えるものだと

指摘している⁶⁾。ローソンはこの展示を21世紀の展示としているが、開館は2000年であり、資料の収集や展示の準備を考えれば、冷戦終結後の展示というべきである。すでにリニューアルが行われることも発表されており、近代の戦争のあり方と深く関わるナチスによる虐殺の展示の中に、ユダヤ人以外の人々に対する暴力も将来は含まれることが期待される。

【注】

- 1) 芝健介『ホロコースト——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』、中央公論新社、2008年、など。
- 2) ロンドンユダヤ博物館のホームページには、以下の記述がある。
Our Mission is to surprise, delight and engage all people, irrespective of background or faith, in the history, identity and culture of Jews in Britain: by inspiring discovery, provoking questions and encouraging understanding.
Our Vision is of a world where cultural diversity and the contribution of minority communities are explored, valued and celebrated, for the enrichment of society as a whole.
<http://www.jewishmuseum.org.uk/mission-vision>（最終アクセス：2017年12月28日）
- 3) 帝国戦争博物館のホームページにある以下の記述による。
IWM is unique in its coverage of conflicts, especially those involving Britain and the Commonwealth, from the First World War to the present day. We seek to provide for, and to encourage, the study and understanding of the history of modern war and 'wartime experience'.
<http://www.iwm.org.uk/corporate>（最終アクセス:2017年12月28日）
- 4) 筆者が入場券購入のため受付に並んでいたところ、ある男性が受付担当者に「ホロコースト展示室の中で妻が少し気分が悪くなったが、迂回路の表示がわかりにくかった」と苦情を伝えた。これに対して受付担当者は「ホロコースト展示室は20年運営されていて、これまでそうした指摘はないけれども、上の者に伝えておきます」と返答していた。また、初日にロンドンユダヤ博物館を訪れた際、売店でボランティアをしていた男性と少し話をした。そして翌日にこのホロコースト展示を訪れたところ、入り口でチケットを点検する係としてこの男性がおり、お互いに大変驚いた。彼は、このどちらの仕事も最近始めたとのことであり、関係者にとっても近距離に位置するこの2つの展示がともにロンドンのホロコースト展示として認識されていることがわかった。
- 5) クリストファー・ブラウニング、谷喬夫訳『普通の人びと

——ホロコーストと第101警察予備大隊』、筑摩書房、1997年。

- 6) Lawson, Tom, 2003, "Ideology in a Museum of Memory: A Review of the Holocaust Exhibition at the Imperial War Museum." *Totalitarian Movements and Political Religions*, 4(2): 173-83.